

日清戦争外交の全局を指導した外務大臣・陸奥宗光の遺たる漢語調の回顧録が『新訂 蹇蹇録』(岩波文庫)である。「日清戦争外交秘録」というサブタイトルをもつ本書ほど、危機における指導者の行動をあからさまに描いた著作を私は他に知らない。

日清戦争とは、日本が清国と戦った近代初の対外戦争である。「定遠」「鎮遠」など世界最強の装甲艦を擁する清国に比して日本の劣勢は明らかだった。にもかかわらず、清国を宗主国、自らを属領とする「清韓宗属関係」を切断して朝鮮を「独立自主」の国としなければ日本の「自衛の道」はないと陸奥は判断した。

半歩遅れの読書術



渡辺 利夫

李朝末期の朝鮮は政争と内乱を繰り返し、その度に清兵が半島に派される状況

を目の当たりにして陸奥は危機感を募らせた。気が付けば世界最大の陸軍国家ロシアも朝鮮をつかかっているではないか。

日本が清国に挑んでこれに勝利する術は「機略」以外にはない。この時期、日本が外務大臣に陸奥を戴いた

陸奥宗光のリアリズム

危機下の指導者の苦悩

たのは天の采配のごとくであった。戦う以上は勝たねばならないが、勝利してなお列強の反発は避けられない。自らを「被動者」、清国を「主動者」とし、余儀なく戦わざるをえない戦争だと装うことに陸奥は努めた。

清国がのむとも考えにく

条約において清国に「朝鮮国ノ完全無欠ナル独立自主ノ国タルコト」を確認させるに至った。

しかし、条約締結の直後にロシアが独仏を誘って「三国干渉」の圧力を加え、日本は重要な「戦利品」たる遼東半島を清国に還付せざるをえなかった。「蹇蹇

い朝鮮内政の共同改革案を提示し、清国がこれを拒否したことをもって開戦の大義とした。弱者が強者に挑んで勝利するには敵の機先を制するより他ない。戦局のこのごときで日本軍はこの戦法に徹し勝利を手にした。そして日本は日清講和

録』の最後にこうある。「畢竟我にありてはその進むを得べき地に進みその止まらざるを得ざる所に止まりたるものなり。余は当時何人を以てこの局に当らしむるもまた決して他策なかりしを信せんと欲す」

言い訳ではない。「兵力

の後援なき外交は如何なる正理に根拠するも、その終極に至りて失敗を免れざることあり」と記す。「臥薪嘗胆」の10年を経て日露戦争勝利に日本を導いたのも、陸奥の三国干渉受諾の決断だったといっても過言ではない。時代背景を論じた著作に岡崎久彦著「陸奥宗光とその時代」(PHP文庫)がある。

外務省庁舎のゲートを入って右手に進み、突き当たりを左へ少し歩いたところに陸奥の銅像が立つ。長いこと酸性雨に当てられたからだろう、数条の緑色の筋が顔に流れて陸奥の涙みを際立たせている。

(経済学者)